芝井探偵の推理

器用貧乏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

芝井探偵の推理

【Nコード】

N16050

【作者名】

器用貧乏

【あらすじ】

あるアパートで殺人事件が発生。新田刑事は友人である芝井探偵に意見を求めることに。容疑者から発せられる嘘や矛盾点、又現場から見つけられる証拠を基に情報をつなぎ合わせて犯人に迫る。

アリバイ？

「プルルル、プルルル」

いつの間にか眠ってしまったらしい。芝井は舌打ちした後受話器を取った。

「はい、芝井探偵事務所」

睡眠を邪魔された腹いせも込めぶつきらぼうに応じる。

「おお芝井いたか。どうせ暇だろ、ちょっと喫茶“ふみ”まで来てくれないか。近くで殺しがあった。詳しい話はお前が来てからするから、どうだ。」

相手は刑事の新田からだった。大学時代からの友人で卒業してからも立場は違えど近い間柄であった。

「まあ2、3件仕事は残っているけどお前との付き合いだ、行くことにするよ。」

「悪いな。あれっ、後ろで声が聞こえるけどお客さんか。無理にとは言わないぞ。」

「ああ、テレビの音だな。毎週この時間は“月曜サスペンス”を見る習慣にしているんだ。」

「ははっ、それは仕事にすまなかった。じゃあ待ってるからな。」
「了解」

ふう、とため息をつきながら受話器を置く。

仕事の話は嘘だった。ここ数週間仕事の依頼など一件もない。新田の奴もこちらの状況を知った上で誘っているのだ。なかなか嫌味な男だ、と思いつつも久しぶりに事件を扱えることは素直に嬉しかった。

「さて、と」

芝井は唯一持っているヨレヨレの背広に着替えて“ふみ”に行く支度をした。ふみまでは電車で一駅行った所の駅前商店街の外れにある落ち着きのある喫茶店で、二人が会うときに頻繁に利用してい

る場所である。当然マスターとも顔なじみで、芝井の顔を見るとこちらから何も告げなくてもテーブルの上にはコーヒーが置かれる。儲からない探偵屋を哀れんでくれているのかもしれない、と邪推してしまうのだが儲かっていないのは紛れも無い事実でありマスターの心遣いも有難かった。

ふみに着きドアを開けると新田が立ち上がり手を挙げて合図を送った。カウンターの前を通り過ぎる際マスターと目が合い目礼をするとマスターはいつもと同じように笑顔で挨拶しサイフォンを用意し始めた。席に着くや否や新田が悪いな、と30分ほど前に聞いた同じ台詞を吐いたので芝井は苦笑しながら本題に進むよう促した。

「昨日、3丁目の“ドレミファ荘”というアパートの110号で絞殺死体が発見された。被害者の名前は田中一郎32歳独身の会社員。死亡推定時刻は昨日26日の午後2時から午後5時の間、発見者は会社の同僚の鈴木啓二で27日の始業時間を過ぎても連絡が取れず、様子を見に来て発見したらしい。」

「ドレミファ荘で田中が、お前真面目に言ってるんだよな。あまにも滑稽で安直なネーミングで戸惑っているんだが。」

「俺は至って真面目だ。ふざけているのは作者だけだ。まあ文才が無いのをこういう所で誤魔化そうっていうことなんじゃないか。」

「そうか、哀れなもんだな。」

「ちなみにアパートの番号は警察への電話番号、同僚の名前は刑事と啓二をかけているのかもな。」

新田が鼻を膨らませて得意げに言うので、

「どうでもいい情報をありがとう。」

と侮蔑を含んだ表情で答えた。

「これまでの捜査で不審者の情報は無い。ちなみにお前は昨日何してたんだ。」

「昨日は午前中“おはようサンデー”を観終わってから出かけた。」

犯行時刻と思われる時間帯には近くの食堂で牛丼を食べていた頃かな。」

「そうか、有力な容疑者が消えることになるか」

新田が大げさにため息をつく。

「そんな貧相な情報しか集まっていないのか。お前こそちゃんと仕事してるのか。」

芝井が毒づくくと、

「冗談だよ。田中の手帳から死亡した日の予定を調べたら3人の人物に会うようなことが書かれていた。

個人的にはこの3人の内の誰かが犯人なら楽なんだがな。」

「3人の聴取は。」

「それが終わってお前に連絡したんだ。勘だけ良いものを持つてるからな、お前は。まあお手並み拝見といったところだ。」

芝井は少し表情を崩し「じゃあ聞かせてもらえるかな。」と言つと、新田は大きく息を吸い込んだ。

「ご足労願いまして有難うございます。簡潔かつ迅速な聴取を心がけますので、どうかご協力よろしくお願いいたします。」

3人揃ったところで新田が話し始める。

「それではお一人ずつお話を伺って参りますので名前を呼ばれたら奥の部屋にお越し下さい。えー、まずは桃川ももかわゆたか豊さんから参りましょうか。」

桃川と呼ばれた男はビクツと顔を上げ「はい」と今にも消え入りそうな声で返事をしてオドオドと新田の後についていった。

聴取はドレミファ荘の空き部屋で行われた。中に入ると小さな机と椅子のみが用意されていて桃川は新田に促されて向かいの椅子に座った。

「今回のこと大変驚かれたでしょう。」

「はい、今も心臓の鼓動が早く感じるほどです。」

桃川は目の当たりにしたことを思い出したのように両手を交差し震える仕草をみせた。

「なぜ警察に連絡下さらなかったのでしょうか。」

「元来臆病なもので、気が動転してしまつてどうすればいいかなんて考えもしませんでした。ドアを開けて死体を見た瞬間は犯人がまだ潜んでいるかもしれないと思い脱兎の如く逃げ出し、自宅に戻つた後は布団を被つてただただ震えてました。」

「鍵はかかつてなかったんですね。」

「開いてました。田中は鍵を閉める習慣はなかったと思います。この質問にはやけに自信ありげに答える。」

「その根拠は？」

「田中の部屋に来たときに鍵がかかっていたことがないですから。私はフリーターで暇があるときにはよくここに来たりするんです。」

「なるほど。最近来られたことは？もちろん昨日を除いてですが。」

「二週間ほど前ですかね。来るときは彼の休日に合わせて来るようにしています。」

新田は桃川の顔を見た。大分落ち着いてきたようで話し方にも余裕が感じられた。

「その時と今とで部屋が変わつたところはありませんか。」

「そうですね、まあ見ての通り雑然としていますから詳しくは分からないですけど、大きな物が動いたということはないと思います。」

「死体の下には布団が敷いてありましたが、これもいつも通りですか。」

「はい、万年床でしたね。」
今のところ問題はなさそうだ。新田は指であごを撫でる仕草をしながら思索した。

「事件当日は何時にこちらに来ましたか。」

「四時半ぐらいですかね。来るときは大体その時間帯に来ます。そこから酒をチビチビやりながら世間話や愚痴をこぼして過ごすこと

が多かったですね。」

「そうですね、いや有難うございました。今日のところはこれで結構です。」

新田がそう言うと、桃川はふうつと大きく息を吐き一礼して去って行った。新田はお茶を飲んで一服すると近くにいた捜査員くりつみしげるに栗海成を呼んでくるよう指示を出した。

「栗海成さんですね。おかけになって下さい。」

新田がそう呼びかけたのだが、栗海は無言で面白くなさそうに席に着く。

金髪・長髪に鼻ピアスか、見るからに怪しいって風貌だな。こういう奴が犯人なら分かり易くていいんだがな。新田は少し笑みを含みながら思った。

「刑事さん、俺は何も知らないぜ。確かに田中のアパートには行っただけど、それは新聞を配るためで田中の部屋には入ってないし。」
栗海が先手を打ってくる。

「ほう、新聞を配達する仕事をしてらっしゃるのですか。大変なお仕事に従事されていますね。」

新田は大げさに興味を持ったように感心し、相手の気持ちを落ち着かせようとす。何を苛立っているんだこの男は。まあ最近の二・三十代は総じてこのような傾向があるのかもしれないが。

「そうだ。田中は俺んとこの新聞は取ってないけど他の部屋の奴が取ってるから毎日行かねえといけないんだよ。」

「事件当日も同じようにこのアパートに来たということですね。」

「そうだな。だからって関係ねえよ。」

「昨日は何時に配達に来ましたか。」

「三時ぐらいじゃねえか。いちいち計算して来てるわけじゃねえし。」

「再度確認しますが、田中さんの部屋には入ってないんですね。ドアが開いてて中が見えていたということもなかったですか。」

「そうだって、しつこいな。」

新田は栗海の表情を見た。先入観を持つことは厳禁だがこういうタイプの人間は虚勢を張ることが多く案外嘘をついているかどうかの判断も分かり易いことが多い。今のところ苛立ってはいるものの表情その他に変わった様子は見受けられない。ただそのイライラが栗海が生来持つているものなのか誤魔化そうとしているのか断定するにはもう少し情報を集めていかなければ分からない。

「田中さんとはどのような関係だったんですか。こう言うては失礼かもしれませんが、ずいぶん雰囲気が違うように感じるのですが。」

「田中とは高校の同級生ですよ。別に高校の時も卒業した後もつるんでたわけじゃねえ。たまたま田中が配達場所に住んでただけでそれ以上でもそれ以下でもない。もうこれぐらいでいいんじゃないか。」

栗海が席を立とうとする。

「お待ち下さい、これが最後の質問にします。田中さんがこのアパートに住んでいることに気付かれたのいつ頃ですか。」

新田が早口まくし立てた。栗海は立ったままで考え込んで、

「うーん、わからねえ。気付いたら住んでたって感じかな。じゃあな刑事さん。」

栗海は髪をなびかせながら去って行った。それを眺めていた若い捜査員が笑みを浮かべながら、

「新田さんも大変ですね。あんな礼儀知らずの若造を相手にしなくちゃいけないなんて。」

新田はそれを聞くと苦笑いし、

「被害者と同級生ということとは32歳だから俺と同じ歳だよ。」

「ええっ！そんなんですか、新田さんが老けてるとかそういう意味で言ったわけじゃないですからね。」

弁解じみたことを言うので、

「分かってるよ。それより柿沢修かきさわおさむを呼んで来てくれ。」

気まずく感じたのか、捜査員は威勢よく部屋を出て行った。

新田は目をつむり腕を組んで考え込んだ。栗海のような奴を見ると決まってこの国の行く末について頭をよぎる。俺たちの子供あるいは孫の代にはどういう世の中になっていくだろうか。もちろん今よりも良い社会になっているのかもしれないが、その可能性は低いと言わざるを得ない。現代社会を批判するつもりも自説を肯定するつもりもないが（現実には俺も現代社会の構成員の一人なのだから）、なぜか心の中にあせりのようなものを感じてしまう。世間に広がる厭世観だろうか、将来に対する不安だろうか、争いの耐えることのない世界に対する絶望感だろうか、一人では解決できないと思ってしまう自分の意思の弱さに対しての失望感だろうか、いつも結論に達することはない。漠然とした何か分厚く黒い雲のように自分の頭の上を漂い、そして広がっていく。決して消えることのない黒い雲。芝井に話したら「もっと気楽に生きろよ」とか何とか言われ一笑に付されるだろうか。ただ過去を振り返ったときに感じることは今という時代は以前に手にしていたものを失いつつあるということだ、精神的な何かを。歴史上純粹にこの国のことを憂い、行動し、そして死んでいった者が大勢いたことだろう。そういう人たちが現在の世界を見てどのように思うだろうか。

「お疲れのようですね、刑事さん。」

いつの間にか柿沢が部屋に入って椅子に座ろうとしていた。

「ああ、いえ少し考えごとをしていたんです。」

新田は頭を振って雑念を取り払おうとした。

「いやああ大変な事に巻き込まれてしまいましたな。」

全く大変では無さそうな感じで柿沢は笑みを浮かべている。年齢は50代くらい、背は低くずんぐりしている。頭髪の方も俗に言うバーコードという典型的なおじさんといった感じだ。

「失礼ですがご職業は？」

「保険の営業をしております。昨日田中様の家にお伺いしましたのも田中様のご契約されています保険の内容が若干改定されますのでそのご説明にあがりました。」

丁寧だがゆつくりと粘着質な話し方で返答したので新田は平静を装いながらも頬は引きつっていた。新田は敬語という概念を嫌っていた。そもそも敬意というのは心であって形ではない。相手を尊重することは大事なことだと認識しているが、あたかも敬語のようもののを使用しているだけでそれを達成していると勘違いしている輩に対しては何かこちらがバカにされているようで憤りすら感じてしまう。相手は相変わらず締りのない無意味な笑顔を作っている。新田はともすれば暴発しかねない自分の気持ちを抑えつつ仕事に集中するよう深呼吸をした。

「事件当日は何時に来ましたか。」

言葉遣いも態度も無意識にトゲを含んだ感じになってしまう。

「二時半くらいだと思います。」

「田中さんは出てきましたか。」

「はい、すぐに出て来られました。そこから部屋で少し雑談をしてから私がここへ来た主旨を話させて頂きました。」

「約束はされていたんですか。」

「いえ、していません。まあ近くに寄ったんで留守なら出直せばいいだけの話ですから。」

新田は頭の中で今までの話を整理した。柿沢が被害者と話をして、栗海は会っていない。そして桃川が部屋に行ったときにはすでに死体になっていた。

「そうすると柿沢さんが犯人以外で被害者と会って話した最後の人物という可能性が高いですね。」

「だ、だからといって私が殺してなんかいませんよ！」
急に興奮した様子で柿沢が立ち上がった。その額には汗が今にも滴り落ちそうになっている。

「落ち着いて下さい。私は犯人以外で、と言いました。誰も柿沢さんのことを疑っているわけではありません。ただ見たこと感じたことを話しくれればいいですから。」

そう言われてもまだ気持ちが収まらないのかブツブツ言いながら席

に座り直した。

「以前会われたときと何か変わったところはなかったですか。」

「変わったことと言われましても、田中様と頻繁にお会いするわけではないので。ただ髪型が変わっていたこととタバコをやめられたのかな、と言っぐらいです。」

「タバコ、ですか。なぜそのように思われたのですか。」

「田中様は確かヘビースモーカーだったと記憶していましたから。」

それが私と話をしている間もすわなかったですし、周りを見てもタバコのケースや灰皿は見当たらなかったですし。」

「直接確認したわけではないんですね。」

「はい、もし禁煙されている最中であればタバコのことを思い出させてしまいますからね。禁煙中にタバコという単語が出ただけで葛藤が生まれますから。それで八つ当たりされるってこともあります。」

「そういうものですか」

タバコを吸わない新田は素っ気無く応じた。

「刑事さんは吸われないんですね。でしたら気を付けた方がよろしいですよ。今も目の前で苦しんでいる人がいますから。」

ニヤニヤしながら柿沢は指を口に近づけタバコを吸う真似をした。

「すぐ終わりますから今は禁煙でお願いします。」

柿沢は人を苛立たせる天才だな、と新田は思った。あの表情、話し方、タイミング、どれをとっても人を不快にさせる要素を持っている。これが自分のペースに巻き込もうとした作戦であるならかなりの切れ者であるが見る限りでは到底そのように見えない。人は見かけによらないというがはたして、今の段階では判断しかねる。

「帰るときも変化は無かったですか。例えばこれから誰かと会う予定だとか終始そわそわしていたとか。」

「特にきになったこともありません。プライベートな話もしませんでしたし。」

「部屋を出たのは何時くらいですか。」

え、会社に着いたのが四時でしたから、三時半くらいかと思いません。」

「そうですか、わかりました。今日のところはお帰りになって結構です。」

手帳をパンツと閉じた音が響いた。

「今日のところは、ですか。つまり後日また私がお伺いしなければいけないということでしょうか。」

柿沢が不安そうに聞く。

「必要とあらばそうせざるを得ません。もしかしたら私たちの方からあなたの会社へ行くこともあるかもしれせんし。」

「会社へですか！」

突然奇声のような声を発したので新田は目を丸くして柿沢を見た。

「いえ、失礼しました。これ以上会社に迷惑をかけることは避けたいものですから。できましたら私の携帯電話にご連絡頂けますか。」

懐から名刺を取り出し新田へ差し出す。

「わかりました。もし会社に用ができましたら一報入れることにします。」

「くれぐれもお願いいたします。それでは失礼」

何かぐつたりした様子で柿沢は部屋を後にした。

新田はこれまでの内容に疑問点がないか情報の端々をつまんで繋ぎとめようと頭を張り巡らせた。が、いかんせん情報が足りなさ過ぎる。だいいち三人の聞き込みをしたところであの三人の中の一人が犯人かどうか分からない状況なのだ。もしかすれば『犯人は外部からの侵入者でした、あははは』と連絡が入るということも有り得るのだ。さて、どこから手をつけようか、そうだ！芝井に電話でもしてみるか、どうせ暇だろうし。新田は携帯電話を取り出し操作し始めた。

「ということなんだ。」

一気にまくし立てて喉が渴いたのか新田は温くなったコーヒをゴクリと飲み干した。

「ふうむ」

芝井は自分の髪の毛を指でクルクル回すような仕草をしながら考え込んでいる。

「おっその仕草、一休さんみたいになってるぞ。何か良い知恵浮かんでこないか。」

新田がいたずら小僧のような顔で尋ねる。

「単なる癖だ。そんな簡単に犯人が分かるんだったらお前なんかいの一番に失職するだろうな。」

冗談を一蹴するかのように突き放した。冗談の飛ばし合いはいつものことで新田はこういうやり取りを楽しんでいた。

「別段おかしな感じや辻褄が合わないことを言っていたということは無いと思うんだけどな。」

新田は表情を切り替えて話しかける

「犯人はわからん。」

芝井はハッキリとした口調で言う。

「まあそうだろうな。」

新田も当然といった顔で応じる。

「犯人は分からない。が、もう一度この三人に聞く必要があることは確かだ。三人ともに矛盾点や不可解な状況が存在している。」

「えっ、そうなのか！」

新田は反射的に芝井の顔を見た。

読者に挑戦

文中で芝井が三人の供述についておかしいと感じた部分はどこであつたか？

但し、勘や思いつきではなく合理的に説明できるものとする。

アリバイ？（解答）

「そうだ。まあ柿沢は秒妙だがな。いずれしてもこの三人にもう一度問い質した方がいいのは間違いない。」

「何がどうおかしいんだ。」

新田が食い付く。自分では気が付く箇所が無かっただけに面白くなかった。

「少しは自分で考えたらどうだ、新右衛門さん。」

芝井は先程一休さんに例えられたことを根に持っていたようだ。二ヒルな笑みとともに皮肉った。

「うゝ、悪かったよ。前言は撤回する。」

「まあいい、そんな小さな事でヘソを曲げる歳でもない。順を追って説明しようか、まずは桃川だったな。」

「桃川がドアを開けて即座に逃げ出した、というのは嘘だな。発見時の被害者と桃川の状態を考えてみよう。桃川は被害者宅に度々訪れていて、以前と部屋の内部に大きな変化はないと証言している。しかも万年床ということも知っていたわけだ。その被害者が布団の上にごろんとなっていたら十中八九寝ていると思うだろう。被害者は絞殺されていてパツと見て死体だと判断が付くはずもない。犯人が潜んでいるかもしれないと思って逃げたということは事実かもしれないということ差し引いても即座にその場を去ったという証言には納得できない。これが桃川に対する疑問点だ、次は栗海だったな。」

「ちょ、ちょっと待ってくれ」

新田はメモを取るのに四苦八苦していた。芝井の口調が滑らかすぎて手が追いつかないのだ。一度糸口が見つかりと早口になる癖は直して欲しい、とは言えない。また気分を害して彼の推理を聞けなくなってしまう虞があるからだ。気難しい友人を持つのも苦労が多い、

頬を緩めながら片手で芝井を制止させ、もう一方の手で手帳に走り書きした。

「もういいな、次の栗海だが彼には不可解な点が複数存在する。まず栗海が事件当日に被害者に会っていない、という証言についてだ。お前の手帳にも書いてあると思うが被害者の予定には『栗海に会う』ということが書かれていたわけだろ。例え栗海の言っていたことが真実ならば被害者が虚偽の記述をしたことになる。被害者自身が使用している手帳に嘘の予定を記載する利点は今のところ皆無だ。従って栗海の主張には無理があると言わざるを得ない。これが一点目。そして二つ目は栗海が新聞を配達しにこのアパートを訪れたということについてだが、これは嘘だ。まず俺とお前とのやり取りの中で確認しておきたい事実があるんだが、お前から電話を受け取った際に俺が見ていたテレビの内容は“月曜サスペンス”だった、これが今日だな。そしてお前が冗談半分で聞いてきた事件当日の俺のアリバイに関しての俺の証言は『午前中は“おはようサンデー”を観ていた』だ、これが事件当日。ここから導き出される結論として『事件当日は日曜日』であるということ。これを栗海の証言と組み合わせると“栗海は日曜日に夕刊を配達していた”ということになる。しかしそれは有り得ない、なぜなら毎日配っているという日刊新聞紙の日曜日に夕刊は存在しないからだ、まあ早い話休刊日だつてことだ。つまり配る新聞が無いのにもかかわらず配達をしにアパートを訪れたという証言には明らかに矛盾点が存在する。これが栗海に關しての疑問点だ。」

一区切り付いたのか、コーヒークップに手をやる。ゴクツと一口飲むと再び臨戦態勢をとった。

「最後に柿沢の供述についてだが、この疑問点に関してはやや説得力に欠けるところがある。というのもも一つの前提が成り立たないといけないんだ、『被害者が手帳に記載した予定通り栗海に会った』という前提が。」

「それはほぼ間違いないんじゃないか。会わなかったという供述に

対してメリットがあるのは栗海の方だし。それに今は情報を集めている段階だろ、推理が正しいかそうでないかは明日以降の調査で証明されるだろう。」

新田がフオローすると、納得したのか再び髪の毛をクルクルしながら話し始める。

「栗海が事件当日被害者に時間通り会っていたとすると、柿沢と栗海は事件現場で鉢合わせになっていないと説明がつかなくなる。それぞれの供述を確認してみよう。栗海とは三時に会うことになっている。そして柿沢は二時半に来て三時半に部屋を出たと言っている。」

「時間が重複しているんだな。」

「そう。だが二人の口からそのような話は一切無かった。これはどちらか、あるいは両人ともに嘘をついていることを示している。」

「二人は会っていたが取るに足らないことなので省略した、っていうのはどうだ。」

新田が思い付いたことを投げかけてみる。

「何のために？自分に殺人事件の嫌疑がかかっていたらできるだけターゲットになりたくないって思うのが自然だろ。ましてや的を逸らすためのカードを持っているのに使わない理由がどこにあるっていうんだ？」

新田説は闇に葬り去られようとしていた。

「まあ可能性として残しておこう。起こらなかつたと証明するには情報が足りないし。とりあえず三人を再チェックする必要があるっていうことは分かっただろ。」

店のシーリングファンを眺めながら芝井が言った。

「チェックねえ。そうだ、明日各々訪ねていくからお前もついて来いよ。それだったらお前も直接三人に会えるし。」

「そうだな、一度係わった以上ある程度まで付き合う義務はあるかもな」

「義務か、まあいいや。俺は明日の午前中までに現場検証の詳しい

報告の確認と三人のアポを取るようになるから午後を迎えに行くよ。

「新田は伝票をすばやく取り、「マスター！」と大声を張り上げると伝票をヒラヒラさせ清算するよう促した。

外はすでに暗くなっていた。帰宅するサラリーマンもまばらで商店街を照らす電灯のみが明るく地面を照らしていた。

「俺こつちだから。」

ふみを出てすぐ新田は指で自身が行く方向を指して言った。芝井も小さく頷くと左手を挙げて別れをつげた。

新田は薄暗い住宅地を歩きながら芝井のことを考えていた。やはり鋭いな、と。今日芝井が指摘したことは調査が進めば明らかになったことだろうが俺の報告一つでそれを為し得るところに凄みを感じる。犯人を追い詰めるためには情報の正確さとスピードが要求される。今日あいつはその一端を見せた。この事件俺が集めた情報と芝井の推理で解決できるかもしれない、いや解決するんだ。沸々と湧き上がる思いとともに力強く拳を握りしめた。

「頼むぜ、相棒」

夜空の中にひと際異彩を放っている、見事に形作られた三日月を見てそう呟いた。

犯人は誰だ？（概要）（前書き）

犯人は誰だ？（概要）

ここはどこだ？

冷たい感触

壁にもたれかかっていたのか
コンクリート壁の冷たい感触

ここはどこだ？

薄暗い住宅街

先の電灯まで歩いてみようか
乾いた足音だけが鳴り響く

「いたぞ！」

後ろから怒鳴り声が聞こえた
振り向くと一筋の閃光に目が眩む

手をかざして目を凝らすと

男が一人全速力で走ってくる

だんだん近づいてきた

だんだん近づいてきた

逆光で顔はよく見えないが

右手に何かを持っていた

拳銃か短刀か

危険だ

気が付けば逃げていた

T字路を右に曲がった

十字路を左に曲がった

訳も分からないまま
ただただ逃れようとしていた

息が上がってももう走れない
耳をすましてみても
足音は 聞こえなかった
両手を膝にあて
必死に呼吸を整える
汗が全身から噴き出していた

ザザッ
地面を擦る音が聞こえた
顔を上げると

目の前に男が立っていた
左手に 短刀を持っていた

なぜだ！
心の奥底から叫んだ
なぜなんだ
消え入りそうな声で呟いた

ザザッ
背後から地面を擦る音が聞こえた
振り返ると
目の前に男が立っていた
右手に 拳銃を持っていた

銃口が目の前で止まる
引き金にかかる人差し指に力が込められる
男は笑った ような気がした

バァァン！

芝井は飛び上がるように跳ね起きた。吹き飛ばした掛け布団が積み上げられた本を倒し、ガラガラと崩れ落ちた。

「またか」

こめかみを押さえ立ち上がる。こんな夢を見るのも何回目だろうか。シチュエーションは違えど最終的には殺される。銃殺、刺殺、扼殺、撲殺。相手の顔が明らかになったことは無い。深く考えないようにしているが気分の良いものではない。

時計を見ると午前11時を少し回ったところだった。朝寝坊は自営業者の特権だな、と優越感に浸りつつも、瞬時に朝食のメニューはトースト一切れとコーヒーマスターという現実を目の当たりにする。トーストの切れ端をコーヒーマスターで流し込み、身支度を整えて新田を待つことにする。

「ブブブツ」

インターホンの鈍い音が室内に切なく鳴り響く。芝井は賓客を迎えに行った。

「よっ、元気？早速行くかあ」

新田が声を上げる。

「元気って、昨日会ったばかりじゃねえか。こちらパン一枚で大声も出やしない。その勢いだと事件に何か進展でもあったか。」

「いや、何も。まあ気持ちだけでも盛り上げていかないとな。立ち話も何だから移動しながら話しようぜ。」

二人は並列で車の停車している方へ歩き出した。

「それ、昨日言ってた被害者と現場の状況報告書のコピー。今から桃川の家に行く間に目を通しておいてくれ。」

車内に入るや否や新田が指差し言った先に資料が無造作に置かれて

いた。それを摘み上げた芝井の顔が仕事モードに突入していく。

被害者状況報告

名前：田中 一郎（32歳）

職業：会社員

死因：頸部圧迫による窒息死

死亡推定時刻：26日午後2時～5時

備考：右上腕部に打撲痕

左足底にヒマワリの花弁が付着

被害者所持の財布より紙幣が盗難された可能性あり
被害者宅にある貯金箱より貨幣が盗難された可能

性あり

事件現場状況報告

状況：大きく荒らされた形跡無し

凶器：発見されず

指紋：酒瓶、テーブル、その他多数に桃川の指紋検出

栗海、柿沢の指紋は検出されず

備考：スーツが一着も無し（一式全て）

ドアノブ、携帯電話、コップ、歯ブラシ、財布、

貯金箱等に被害者の指紋は検出されず

「おっと、すまない。」

急ブレーキを掛けた新田が謝る。地図と道路とを交互に見ている姿は理由も無しに何回も頷いているように見えて滑稽だ。

「ここを 右かな、いや、もう一つ先か。ええい！曲がってしまえ。」

誰に聞かせるわけでもないのに、つつい言葉を発してしまう。

「楽しそうだな、羨ましい。」

「楽しかねえ。道がややこしいんだよ、こういう時に日本の土地面積の狭さを感じてしまうよな。」

さも一般論であるかのように言うので、土地の小ささと経路の複雑さは比例関係にはないだろう、と芝井は思いつつも黙殺することにした。

「どうだ、ざっと目は通せたか。」

新田が急に仕事の話に引き戻す。

「まあ、だいたい。金銭以外は取られた形跡は無いということか。」

「被害者が死んでいるから確認できないがパスポート、クレジットカード、銀行手帳は部屋に残されていたし、室内が荒らされていないことからそう判断している。」

「会社員なのにスーツを一着も持っていないってどういうことだ？」

「ああ、それは一式全てクリーニングに出していたらしい。田中は服装には無頓着みたいだな。スーツはそれしか持っていないみたいだし、私服もジーパンとTシャツ、スウェットくらいしか無かった。」

「凶器は現場になし か。」

「犯人が持ち去ったんだろうな。索状痕から太目の紐か縄みたいなものらしいということしか分からない。」

「タオルとか被害者の所持品で代用した可能性は？」

「ない。太さや形状が一致しない チツ、早く行けよ。ああ、赤になっちまった。」

信号が黄色から赤に変わったのを見て新田が文句を言う。

「打撲痕もあるんだな。」

「たぶん殴られた痕だろうということだが、事件との因果関係は不明だ。」

「詳しい箇所は？」

「ちょうど肩に沿って外側付近つてとこだな。まあ通常殴られたり叩かれたりすればその辺りだろうから特別変わった痕跡でもない。」

「そうか。他には 足にヒマワリの花びらが付いていたのか。」

「田中の部屋にヒマワリは存在しない。つまり外部から付着してきたものだろう。」

「ふうん。指紋は桃川のみ検出か。」

「ドアノブ、携帯電話、コップ、歯ブラシ、財布、貯金箱には拭いた形跡がある。犯人の仕業だろうな。」

「何のために ってまあ犯人が触ったからだろうな。」

「ということは桃川は圏外か」

「そうとは限らない。殺人に結びつかないところをあえて残したっていう可能性もある。」

「なるほど おっと、ここだ。議論は後にしよう。目的地に到着だ。」

住宅街の一角に車を停車させ、『桃川』と表札が掲げられている家のインターホンを押した。

犯人は誰だ？（1）

「ポロローン、ポロローン」

「へえ、最近のインターホンは単なるブザー音じゃないんだな。」
芝井が妙なところで感心している。しばらくするとインターホン越しに「どちら様でしょうか？」という年配の女性の声が出たので新田は自身の身分とここへ来た主旨を述べると、明らかに先程とトーンが違った声色で「すぐに行かせます」と応答した。やがて明らかに寝起きだろ、という桃川のだらしない姿と対面した。

「こんにちは、もう一度お話しを聞きたくてやって参りました。」
新田が愛想を振りまいて切り出すと、

「はあ、ちよつと待ってて下さい、今支度しますから。」

桃川は踵を返して家の中に入ろうとするので、

「ご面倒でしょうから、玄関先で構いませんよ。」

「いえ、そうではなくて。」

キョロキョロと周りを見る仕草をした後、自分の部屋へと消えて行った。

「親や近所の目が届くところで話したくないっていうことだろ。見てみるよ。」

芝井が新田の腕を突いて示す方向へと目をやると、窓からカーテンで姿を隠し覗いている人影　たぶん母親だろう　が確認できた。目が合った瞬間、サツとカーテンが閉まり人影も見えなくなってしまう。

「お待たせしました、近くに公園がありますからそこで話しましょう。」

先程より幾分シャキツとした（と言ってもジーパンにTシャツだが）桃川が先導役をつとめ公園へと向かった。

「昨日話した以上のことは分かりませんよ。」

公園のベンチに腰を掛けた直後、桃川は二人に話しかけた。そこで新田は昨日の証言の矛盾点（アリバイ？解答編を参照）を指摘すると、桃川の顔は瞬時に青ざめ、動揺していることが見て取れた。

「き、き、気が動転していましたからね、あの時は。しょ、し、少し待って下さい、思い出しますから。」

今もかなり動転しているよ、新田はそう思いながら犯人の尾を捕らえた感触を得ていた。しばらく硬直していた桃川は深く呼吸をした後、

「5分 いや10分くらいは室内にいたかもしれません。けれどその後すぐに逃げたというのは本当です。」

と話し出した。新田はその返答を予想していたかの如く被せるように、

「10分は、すぐに、とは言いません。10分あれば扼殺し逃走することは可能ですから。」

すでに桃川の顔は泣きそうになっている。新田はトドメを打たんとして、

「先程あなたが言ったことを参考にすると、昨日言った『犯人が潜んでいるかもしれないので逃げた』ということも嘘だ。あの狭い部屋なら左右に2、3度首を振っただけで誰もいないことぐらいすぐに分かる。つまり、あなたが昨日言ったことはすべてデタラメだったってことだ。」

新田が怒気を込めて言ったので、完全に萎縮した桃川はうつむき黙り込んだまま動かなくなってしまった。新田は芝井と目を合わせた。新田の顔は勝者のそれであった。今まで黙って様子を見ていた芝井は桃川の背中にそつと手を当てて穏やかな口調で語りだした。

「私たちはあなたが犯人だと思っただけです。あなたが昨日話したことが事実でなかったとしても話せない理由があったんだと、あなたも悩んだ末に選んだ答えであつたんだろうと察しています。真実

を話してはもらえないでしょうか。真実を話せば、それはあなたにとつても決して悪い結果にはならないでしょう。」

桃川はゆっくりと顔を上げ、芝井の顔を見た。まるで救いを求めるように。芝井はにっこりと微笑みを返した。桃川は観念したかのようにうなだれ、ボソボソと小さな声で話し始めた。

「部屋に入つて田中が布団の上に転がっているのを見たとき、最初は寝ているんだと思ひ込んでました。だから普段と同じようにTシャツを脱いで上半身裸とジーパンという姿でくつろいでいました。けどよくよく考えてみると、今までそんなことは一度も無かつたんです。しばらくしても起きてこないで様子を見たところ首に何かで絞められた痕があることに気付きました。そしてすでに死んでいくことも。その瞬間なぜか悪魔のような考えが火花を散らしたように閃きました。今ならお金を盗つても犯人の仕業にできるんじゃないか、と。私は財布を見つければお札を抜き取るうとしましたが、お札は一枚もありませんでした。仕方がないので貯金箱の小銭を、500円玉を集めていたのは知っていたので、それをポケットに入れて急いで家に帰りました。」

「貯金箱と財布の指紋を拭き取つたのはあなたですね？」

桃川が一呼吸おいたところで、新田がねじ込むように尋ねた。

「はい。どちらにも以前に触つたことがあるので指紋があつても問題ないとも考えたんですが、拭き取つておいた方が強盗の仕業だと思つてくれ易いんじゃないかと思ひ立ちまして。」

「それは逆ですよ、桃川さん。」

芝井は先程と変わらず穏やかな口調で言った。そして、「犯人が強盗の仕業というなら指紋は拭き取らなかつたでしょう。なぜなら強盗は通常痕跡を残さないために手袋などを嵌めているでしょうから。仮に素手だつたとしても、それならば強盗が触つた箇所全てに拭き取つた痕跡が残っていないと辻褃が合わない。しかしそんな報告は受けていない。とすれば拭き取らないと都合が悪い、顔見知りの犯行だと結論付けるのが自然であると言わざるを得なくなるんで

すよ。」と続けた。

桃川は芝井の推理を、さも他人事であるかの様に感嘆した後、

「警察の追及を欺くことなんてできないんですね。」
とポツリと洩らした。

「そうですね、桃川さん。ですから正直に話して頂かないと自身の立場をさらに悪くすることになりますよ。」

新田が何か含んだ言い方をした。

「正直に、って。すべて正直に話しましたけど。」

桃川は驚いたように新田の方を向いた。

「財布の中は空だった、と。それを我々に信じると言っんですか。田中さんは会社員だ。平日は昼飯だったり付き合いで呑み行ったりで小銭だけで用を足せるわけが無い。つまり札は財布の中にあっただんだ。」

「それを私が奪ったと。」

桃川は再び泣きそうになっている。

「そうじゃないと合点がいかない。貯金箱の小銭は取りましたが財布の札はそのままです、っていう話を信じるよりはるかに現実的な発想だと思いますが。」

桃川は新田から顔を逸らし、芝井の顔を見つめた。まるで救いを求めるかのように。芝井は苦笑し、俺は子守してるんじゃないぞ、と思いつつも桃川を弁護するように、

「まあまあ、新田も落ち着けて。桃川さんは本当のことを全て正直に話してくれたじゃねえか、これは間違いない大きな収穫だぞ。」

財布の中に札があつたかどうかは今日の俺たちの宿題にしようぜ。」
と新田をなだめて丸く収めようとした。新田も興奮が冷めたのか、
「そうだな。いや失礼しました、桃川さん。これも早期解決を目指す刑事の意気込みが先走つたものと、良いふうに解釈して下さいは幸いです。」

と頭を下げた。そして

「色々と話して下さって有難うございました。またお話しを伺うこ

とがあるかも知れませんが、そのときはよろしくお願いします。」
と締めくくった。

「もう無いことを期待しますよ。」

桃川はため息を付いた後そう言い残し、重そうな腰を上げ帰って行った。

「俺がまるで、いじめっ子みたいだったな。桃川からすれば、お前はピンチの度に助けってくれるヒーローのように感じただろうよ。」
車に乗り込んでから新田が言った。

「それで良かったんだよ、桃川の場合は。お前が矛盾を追及し始めたときに桃川が硬直したんだ。その時、これはマズイと思った。情報を聞き出せなくなる、と。そして桃川の表情を見ると何か哀願するかのような顔だったんで、試しに救いの手を差し伸べてやったんだよ。そうすると硬直が解けて話し始めたんだ。だから、この手法で行けば情報を全て聞き出せるって思ったんだが、予想通りだったな。」

芝井は別に手柄顔するわけでもなく、抑揚なく応じた。

「ヒーローにもなれたしな。」

新田が運転しながらニヤツと笑った。

「よしてくれ。男を救うヒーローになんかなりたくもない。」

芝井は苦い顔を作り拒否する姿勢を表した。

「次は栗海だな。え」と、ここから少し行ってから2本目の いや
3本目の信号を右折か。まあ動いてりゃじき着くだろう。」

地図とにらめっこしている新田を見て、お前にも救いの手が必要なのか、と芝井はため息を付いた。

犯人は誰だ？（2）

「なんだよ、なんだよ。結構良いところに住んでんじゃねえか。見た目はチャラチャラしてたのによ。」

栗海が住んでいるマンションを前にして新田が開口一番嫉妬する。確かに外観も新しくシックな色彩で彩られた建物は格調高くそびえ立ち、ワンルームマンション暮らしの新田が悔しがるのも頷ける。

「人間は必ずしも平等ではない、ということだ。けど経済的なことなら解決できるぞ。今から死ぬ気で働けば。」

芝井が冷やかすように言う。

「マンションを買うことだけで終わる人生なんて嫌だ。俺は一人前の刑事になるために生まれてきたんだ。」

拳を前に突き出し力んだ様子で新田が答える。

「じゃあ妬んでないで仕事しようぜ。一人前になるためには、まだまだ修行が必要だろ。」

「当たり前だ。ようし、こうなったら片っ端から捕まえてやるからな。」

新田が腕まくりをする。片っ端からはまずいだろ、芝井は苦笑した。

オートロック式玄関のインターホン前で番号を押すと、若い女性の声が聞こえた。

「どちら様ですか？」

ずいぶんとゆるい口調にこちらの調子も狂ってしまいそうになる。新田は自分の身分と訪問の主旨を話すとともに栗海成を出すようお願いを出た。すると

「シーちゃん、おまわりさんが呼んでるよ。」

さらに甘さも追加して応じられた。新田は痒くなってきたのか、そこらじゅうをボリボリと掻きむしっていた。

「ああ、昨日の刑事さんか。今出るから待っていてくれ。」

と声がしたので待っていると、Tシャツにハーフパンツ姿の栗海がやってきた。

「刑事さんたち飯食った？俺まだなんだわ。ファミレスあたりで話しようぜ。」

栗海の提案に乗ることにして、男三人でファミリーストランに向かった。歩いている途中新田は栗海の方を見て、「シーちゃん」と呟いた。

昼食を食べ終えたところで 芝井たちはコーヒーだったが

新田は昨日の栗海の発言に対しての矛盾点（アリバイ？解答編を参照）を指摘した。栗海は悪びれた素振りもなく、とぼけた口調で

「あれ、そうだったっけ？最近物忘れがひどくて困っちゃうよな。」

「2、3日前の話です。物忘れとかいうレベルじゃない。今度は本当のことを教えてください。」

新田が凄む。

「そうカリカリすんなよ。日曜だろ、え、あっそうだ、ケンの結婚式に行ってたんだ。そうだ、そうだった、行ったよ田中ん家。祝儀の金が足らなくてよ。けど、いないみたいだったんでそのまま式場に向かったよ。印象が薄かったから忘れてたんだな。」

栗海はハハツと笑い、左手にスプーンを持ち、先程来た食後のデザートを食べる。

「お金が足りない？あんな立派なマンションに住んでいるのに？」

新田が疑問を口にする。

「あれは、ヨシコの家だ。あいつの実家が金持ちでさ、買ってもらったんだと。俺はその居候さ。じゃなきゃ、新聞なんか配ってるかよ。」

「なるほど、正論だ。結局、祝儀のお金はどうしたんです？」

「ああ。式場でツレに借りたよ。」

興味なさそうに窓の外を眺めて答える。

「昨日の嘘と今日の話をもとめると午後3時に田中宅へ結婚式に行く身なりで訪れたが、不在のためそのまま式場に行った。と、こういうところだな。」

新田が手帳に記録しながら言う。

「わかっただろ？ようするに俺はしががない新聞配達人だが、殺人事件には一切関係ないってこと。さくで、腹も一杯になったし、そろそろ帰るか。」

栗海が席を立とうとした時、持っていたコーヒークップをカチャツと音を立てて置いた芝井が栗海の方へ顔を向け、

「あなたは嘘をついている」と言い放った。

「へえ、どこが？」

は挑戦的な眼で芝井を見る。芝井は栗海の視線を意に介さず続ける。

「まず田中さんが不在だったということは有り得ない。あなたは田中さんに会ったんだ、手帳にあなたに会う予定が書き込まれていたんですから。もう一つ、あなたは田中さんの家からお金を取得している、それが借りたのか盗んだのかは分かりませんが。私たちは桃川さんから死体を発見したときには財布の中にお札は無かったという情報を得ています。誰かが抜いたんだ、それは田中さんかあなたのどちらかだ。」

「その桃川つてのが嘘を付いているんだろ。」

栗海がぶつきらぼうに答える。

「それは無い。例えば、栗海さん、あなたが泥棒だとしましょう。部屋に入って物色したところ財布と貯金箱が見つかった。その内一つを持っていくとすれば、あなたはどちらを持って行きますか？わざわざ嵩張って重量のある貯金箱を持って行きますか？誰だつて財布のお札を狙うでしょう。それなのに貯金箱を持ち去って、お札はそのままにしておいたと嘘を付くことは自身の身を危険に晒すだけで何のメリットも無い。」

芝井は強い口調で言う。すると栗海は不敵な笑みを浮かべながら反論した。

「俺はこう見えてもミステリ小説を読んでいたことがあったんだ。あんたの言ってることは理屈であって真実じゃない。俺が田中から金を盗ったって証拠があるのか？」

新田は芝井を見た。桃川の話は今日聞いたことで裏などは取れていない。当然証拠を出せと言われれば引き下がるしかない、と思っていたが意外にも芝井は笑っていた。

「あなたは田中さんから『盗った』と認めるんですか？私は貸し借りか盗んだかは分からないと言っただけですけど。」

「そんなことは言っつてねえ。早く証拠を出せつて言っつてるんだ。」

栗海もだんだん興奮してきて語気が強くなる。しかし相変わらず芝井は落ち着いている。

「今出せと言われれば困りますが、証拠はありますよ。」

「あるわけねえ。」

「結婚式に行かれましたよね。そのとき祝儀を渡している。私はあなたが渡した祝儀の紙幣から田中さんの指紋が検出されることを確信しています。」

そして

「新田刑事、今すぐケンさんという方に連絡を取って、捜査員を向かわせて指紋の照合を依頼しましょう。」

と続けた。新田は「分かった」とすぐさま席を外し、携帯電話を取り出して捜査員の派遣を要請した。栗海は明らかに動揺していた。新田が電話している間に

「栗海さん、今日は有難うございました。また照合の結果が出たらご連絡差し上げますので、その際は協力下さい。」

と芝井が締めた。

栗海は憤怒の表情で席を後にした。

しばらくすると新田が戻ってきた。

「あれっ、栗海は？」

「帰したよ。あれだけ追い詰めたらもう何を聞いても答えてくれないだろう。それに指紋照合の結果が出ないことには先に進めないしな。」

「そうか。そうだな。いや、やっぱりお前を連れてきて正解だったな、勉強になるよ。」

と感心するので、

「刑事が探偵を見習ってどうするんだよ。」
と芝井は笑って言った。

「さうて、次の柿沢が最後だ。頼むよ、先生。」

と新田がおどけると、芝井は窓の外を見ながら苦笑した。
景色はもうすでに朱の色に染まっていた。

犯人は誰だ？（3）

新田は以前柿沢と約束した通り会社に直接訪れる前に電話で連絡した。すると、会社近くの喫茶店で話を聞くということになったのでその喫茶店で　またコーヒーを頼んだ　柿沢が来るのを待った。

「いやあ、今日は良いドライブに付き合わせてもらったよ。あれだけ長い時間夕焼けを見ることなんて今までなかったからな。」

芝井は半分本気で、しかしもう半分は新田の方向音痴ぶりを皮肉って言った。だが新田はそれに気付いていないのか、

「そうだろ。何でも早く着きゃいいってもんでもないんだ。人生だつて同じだ。迷って、遠回りして、それでも一歩一歩前へ進んで行った方が充実したライフが送れるってもんだ。」

と悟りを開いた老人のような人生観を得意げに話すので、芝井も色々な意味で呆れ返ってしまった。お互いそんな冗談を飛ばし合いながら雑談をしていたら、柿沢が喫茶店に入ってくる姿が見えたので新田が立ち上がり合図した。

「いやあ、遅くなつてすみません」

社交辞令的な感じで柿沢が言う。すると芝井が、

「急で申し訳ないのですが、一度会社の方へ案内してくれませんか？我々としても今の段階では少しでも情報が必要なものでして、

と願いだ。が、柿沢は汗を拭き愛想笑いを浮かべながら

「はは、まあ機会がありましたら。あの、こちらの方は？」
とうやむやにして新田の方を見る。

「芝井と申しまして、私の　まあ助手みたいなものです。」

と新田も誤魔化する。

「はあ、それでお話しというのは？」

柿沢は時計を気にしながら用件に入るよう促したので、新田は昨日の柿沢の話しについての矛盾点（アリバイ？ 解答編参照）を指摘した。

「あ、あれ。おかしいですね。」

柿沢は笑っているが、頬は引きつっていた。

「おかしいのは柿沢さん、あなただけです。私たちはここに来る前に桃川さんと栗海さんの話を聞いている。栗海さんは3時に田中さんと会っていて、その時に田中さん以外とは誰とも会っていない。つまりあなたの話が嘘だったということになる。」

芝井は無表情で問い詰める。

「

柿沢は顔を強張らせたままで言葉を発しようとはしない。

「わかりました。新田刑事、やはり柿沢さんの会社に行こう。会社の人に聞けば柿沢さんが何時に出て何時に帰ってきたか聞かせるれるだろうから。」

芝井は立ち上がり、出て行く素振りを見せる。

「ちよ、ちよつと待って下さい。今、思い出している最中なんですから。」

柿沢が芝井の行く手を遮る。芝井は無表情のまま席に戻り相手をじっと見つめて話し始めるのを待つ。柿沢は手帳をパラパラとめくり思案している。

「あつ、そうか。田中違いだったんですよ。私が担当している人にもう一人田中さんがいるんです。その人と混同していたんですね、どうもすみません。」

柿沢はポンと手で音を鳴らす。しかし芝井は相変わらず表情を変えず、

「で、殺された田中さんの家には何時に行っただんですか。」
と頬杖を付きながら言う。

「4時くらいに行つて5時前には出ましたね、はい。」

柿沢は尋常ではないくらいに汗をかき、それを必死に拭っている。芝井は新田に目配せをした。嘘を指摘するのも面倒臭くなつたのだらう、後を新田に任せるようにコーヒークップに手をつけた。

「もう、嘘はやめましょう。仮にその時間に行つたとすれば今度は桃川さんと会つていないといけなくなる。さらに、桃川さんが来たときにはすでに田中さんは死んでいたわけだから、今柿沢さんの言つたことが本当だとするならば、この殺人事件の犯人はあなたということを自身で自白したも同然なんですよ。それとも今の話が真実で、あなたが田中さんを殺したというんですか？」

「えい、いや、断じて私は殺してなんかいません！」

柿沢の顔はもはや色を失つていた。

「もうお分かりでしょう、我々の追及から逃れることが出来ないということ。そんな急場しのぎの嘘で騙せるほど警察は甘くない。」柿沢はがっくりと頭を垂れて、仕方無さそうに話し始めた。

「田中さんの家には1時くらいに行きました。そして30分ほど話しをして出て行きました。」

「なるほど。それでしたら今度は1時半から会社へ戻つた4時までの間何をしていたかが問題になってくる。4時に会社へ戻つたのは本当なんですよ？」

「はい、その時は少し疲れたんでマンガ喫茶で休憩してました。」

柿沢は消え入りそうな声で応じる。

「2時間半も？ははあ、なるほど柿沢さん、さぼっていたのを会社に知られたくないから我々が来るのを拒んでいたわけですね。」

「はい、まあ。いや、決してさぼっているわけでは。ただ、今度こういうことがあるとクビにすると社長から言われてたもんで、さぼりの常習犯だったわけだ。出来の悪い社員を持つと苦労するな、と新田は柿沢に呆れながらも会社には同情した。

「このことはどうか内密にしておいてくれませんか。」

柿沢が懇願するように頭を下げる。が新田はあくまで毅然とした態

度で

「約束はできません。が、今のところ事件と因果関係は見られませんが、今のところ報告は保留にしておきます。」
「言い放つ。」

「ありがとうございます。」
「疲れた笑顔で新田を見る。」

「勘違いしないで下さいよ。捜査上、必要性が生じれば躊躇なく報告しますからね。」

「はい」

「では今日のところはこれで結構です。有難うございました。」

新田が礼を言つて柿沢も立ち上がるうとした時、芝井が声をかけた。
「柿沢さんは環境問題に興味がありますか？みたところ軽装ですが。」

柿沢はゆつくりと芝井の方を見て、

「ああ、これは会社の方針です。クールビズっていうんですか？何かそういう決まりがあるんです。」
「と全く興味なさそうに言った。」

「ということは田中さんの家に行ったときもそれに近い感じだったってことですね？」

対して芝井は興味がありそうだ。

「ええ、近いというより全くこの格好でした。」

「証明はできますか？」

芝井が食いつく。柿沢は首を傾げながら、

「会社の人に、ああ、そういうえば2丁目のマンガ喫茶を出た後フラフラしていた時にお巡りさんに質問、ええと職務質問っていうんですか、それを受けまして持ち物とかも検査されたんでそのお巡りさんに聞けば分かると思います。あの、それが何か」
「と言った。」

「いえ、有難うございます。どうぞお帰りになって下さい。」

芝井は詳細を説明することなく切り上げた。柿沢は力の無い表情で

喫茶店を後にした。

「さっきのことなんだけど2丁目の交番に確認しておいてくれないか。」

芝井が助手席から動いている景色を眺めながら言った。

「そういえばやけにこだわってたな。何か気になるところでもあったか？」

新田は運転しながら問いかける。

「うん、まあ。」

芝井は曖昧な返事をする。

「まあいいや、確認しておく。ところでお前、これからどうする？」

「“ふみ”に行つて夕飯がてら今日の話をまとめようと思う。たまには売上げにも貢献しとかないとな。」

「そりゃ良い心掛けだ。じゃあ俺も貢献するでしょう。二人で意見を出し合った方が解決も近くなるだろ。」

「そうだな。話し相手がいた方がはかどるかもしれないな。」

「そうだろ。じゃあ行くか。」

皮肉のつもりだったのだが、またもや新田は気付かない。こいつ刑事に向いてないんじゃないか？

芝井はそう思いつつ窓を開けると生温い風が吹き抜けていく。まだ秋の声は聞こえてこない。

犯人は誰だ？（まとめ）

“ふみ”に着くや否やカレーを注文した 早く出来るから

芝井は黙々とカレーを口に運び、食べ終わると今度はコーヒーを頼み満足そうな顔で飲んでいる。新田も同じものを頼んでいたのだが、芝井が半分も食べ終わらない内に全て平らげてしまっていた。朝食は職業病だな、などとぼんやり思いつつ芝井が一息つくのを待っていた。

「紙幣の指紋と交番の警察官の確認は済んだのか？」

芝井がカップを置き、新田に尋ねる。

「ああ、お前が食っている間に立て続けに連絡が入った。そろそろ捜査会議といこうか。」

かなり小規模な会議だな（まあ人数が多ければいいっていうものでもないが）と思いつつも「そうだな」と芝井は返事をした。

「また順を追って考えた方がやり易いよな。指紋とかの結果も話しの流れに沿って入れていこう。」

芝井は黙ったまま頷く。

「まずは桃川だ。このときは財布の中身が問題となっていた。」

「紙幣の指紋は？」

「ばっちり栗海の指紋が検出された。これで桃川が言った内容の信憑性は高くなった。」

「だからといって犯人じゃないとは言いきれない。頭の切れる犯人なら2重3重の罠を仕掛けている。」

「これがフェイクの可能性があるっていうことか？」

「一旦自分を容疑の圏内に入れておいて、後から出てくる事実によって圏外であると他人に思わせるっていう可能性は残されている。」

「なるほど、今の状況がまさにそれって言いたいんだな。つまり窃盗をしたことによって殺人もしたんじゃないかと思わせて、窃盗の容疑を晴らすことで殺人容疑からも脱しようとしている、と。」

「桃川の場合、窃盗の容疑は晴れていないけどな。それに今回はその可能性は低いと考えている。なぜなら、栗海が紙幣を盗っていたというのは全くの偶然だったからだ。」

「桃川は、栗海が田中の家に来てお金を盗ることを知っていてそれを利用したとは考えられないだろうか？」

「どうやって知るんだよ？まあいいや、付き合っただけで。仮に桃川が栗海の所業を知っていたとしても、それならどうしてわざわざその日に合わせて貯金箱の金を盗もうとするんだ？前にも言ったが同じ盗むんだったら紙幣を選ぶのが自然だ。だから知っていたなら桃川は栗海を出し抜いて先に紙幣を盗ることを選んでいるはずだ。ましてや田中は殺されているんだぞ、殺人の容疑を負ってまでその状況を利用して窃盗するようなメリットは何処にも無い。」

「むむむ」

新田は何とか論破しようと思案したが、続く言葉が思い付かないので口をつぐんだ。

「まあ、まだ始まったばかりだ。結論は議論が出尽くしてからでも遅くはない。次の栗海に行こう。」

芝井が次を促してきたので、新田も頭を切り替えた。

「え〜と、栗海の問題点は さっきの指紋の照合だったな。これも紙幣を盗ったというだけで直接殺人に繋がるわけじゃないんだよな。」

「桃川と違う点は栗海の場合はまだ窃盗罪は成立していない、というところだ。俺たちが勝手に『盗った』といっているだけで栗海は『借りた』と言っている。さらに言う借りたというなら被害者はその時点では生きていたということが証明される。そして盗ったというのなら？桃川の時のように死んでいたのを発見したのだが紙幣を盗んだ、？殺した拳銃紙幣も盗んだ、？隙を見て盗んだ、ということと考えられる。この供述の真偽は殺人に直接関係していると言ってもいいだろう。」

芝井はさらに続ける。

「次に、この証言の真偽と犯人の可能性を検証してみよう。栗海が田中にお金を『借りた』というのなら犯人は、栗海か桃川。『盗んだ』場合の？の状況なら犯人は柿沢、？ならもちろん栗海、？なら桃川ということになる。」

「つまり栗海の証言の真偽がこの事件の核になっているということか。けどあいつ、嘘ばかりつきやがるからな。」

新田は渋い顔になる。

「それを見極めるのも警察の仕事だ。しかも証言だけじゃ逮捕できない。それを裏付ける物的証拠も必要だ。」

「凶器もまだ見つかってないしな。」

「この事件に関しては『凶器の持ち主』犯人』と考えても良いだろう。凶器を持ち去っているわけだからな。もちろんもう処分してしまつてこの世に存在していないかもしれないが。」

「おいおい不吉なこと言うなよ。」

新田は苦笑いする。

「まあいい、最後の柿沢に行こう。」

芝井が髪の毛を指でクルクルさせながら言う。

「柿沢はいつ田中に会っていたのかが問題になっていたな。」

「職務質問は？」

「事実だった。巡查曰く、不審人物がいたので職務質問をして所持品を確認したと。所持品には特に変わった物はなく、服装も今日見たのと同じという報告だった。さらにマンガ喫茶にも確認を入れたが、1時50分くらいから4時前まで柿沢が利用していたという裏も取れた。」

「お前らしくないな、そんなに気が利くなんて。」

「俺もたまには良い仕事するだろ。」

新田は子供のように得意げな顔になる。

「これで田中に会った順番に偽りは無かったということが判明したな。」

「最初に柿沢が来て田中と保険の話をして、次に栗海が祝儀につ

いて何やらあつて、最後に桃川が遊びにきたか」

新田が手帳を見て確認する。そして芝井の顔を覗きこむように、「そういえば、今日のお前面白かったな。桃川の時にはヒーローになつて、栗海の時には挑発に乗ること無く冷静に、そして柿沢の時には一転強気になつて問い詰めたり。」

冗談めかして言った。

「『兵は詭道なり』」

「はあ？」

新田は驚いた表情になる。

「『孫子』の兵法書だよ、有名な一節だろ。ざっくり解したら戦争は偽りだらけであるから駆け引きが重要である、ということだな。お前にも理解できるように言えば、臨機応変に対応していかなければいけないということ。」

「ふうん、すごいなお前。兵法も極めているのか、」

「極めてなんかいない。まあそういう心構えで臨んでいこうということだ。」

芝井は表情を変えずにコーヒを飲む。

「お前、本当はもう犯人の目星が付いているんじゃないのか？」

「まあな、けどまだ足りないこともある。そこでお前に頼みがあるんだが。」

「そりゃあ事件が解決するんだつたら協力は惜しまないけど」

新田はその内容が知りたくてウズウズしている。

「それじゃ、明日犯人の所へ行こう。」

芝井は手でマスターを呼び清算しようとしている。

「えっ今日じゃだめなのか。」

「だめだ。だから調べてほしいことがあるって言っただろ。それと、ちよつと駆け引きも必要なんだ。」

芝井は少し笑みを浮かべ席を立った。新田も後についていく。

「じゃあまた明日。」

芝井はそう言つて一人で歩いていく。新田はその後姿が消えるまで

ずっと見ていた。

読者に挑戦

芝井は犯人を誰だと考えているか？
勘や思いつきではなく合理的な説明を必

要とする。

犯人逮捕 くエピソードく

インターホンを押すと「どちら様ですか」という声が返ってきた。このインターホンの音も甘ったるい声も昨日に聞いているはずなのにすでに何か懐かしい気持ちがして感慨深い。「どちら様ですか」ともう一度聞こえてきたのでハッと我に返った新田は栗海を出すようお願いした。

「シーちゃん、今出てますよ」

「いつ頃戻られますか？」

「コンビニに行ってるだけだから、すぐに帰ってくると思いますよ」

「そうですか。有難うございます」

新田はヨシコの真似で語尾を延ばしてインターホンを切った。横で芝井が「馬鹿か、お前は。」と冷たい視線を向けている。

「直ぐ帰ってくるそうだから、ここで待っていていよう。」

新田が何事も無かったかのように言った。

「やあ栗海さん、ちょっといいですか？」

マンションに戻ってきた栗海を玄関先で捕まえた。栗海は舌打ちをし、新田たちを睨んだ。

「またかよ、もういいだろ。」

明らかにうんざりしていた。

「いえ、残念ながらそうはいかないんですよ。今日は署までご同行願いたいですよ、もちろん任意なので拒否する権利はありますがお互い面倒ですから素直に従ってくれと有難いですね。」

新田は丁寧な受け答えをする。

「俺が犯人だって言いたいのか？」

「そこまでは言っていないません。しかし、重要な人物であると見えます。」

「証拠は？証拠が無いと逮捕できねえだろうが。」
栗海はすでに敵意剥き出しでこちらを見ている。これを見て勝負をかけようと思ったのか、芝井が割り込んできた。

「栗海さんが渡した祝儀の紙幣から田中さんの指紋が検出されました。あなたは日曜日に田中さんの家に行って紙幣を取得したのがこれで明らかになりました。」

「ふん、田中から借りたんだ、だからなんだってんだよ。関係ねえだろ。」

「いえ、あなたが田中さんの家に行ったということは少なからず事件と関係があったのです。あなたはやはりお金を盗んでいる。田中さんには右腕に殴られた痕がある、これは田中さんとあなたとのやり取りの中でトラブルが発生して出来たものだと考えています。そのトラブルとは何か？お金でしか有り得ない。友好的に貸し借り関係が成立したのであれば殴る必要なんてないのですから。」

新田は疑問に思った。なぜここにきて急に打撲痕の話になったのだろう。栗海も同じ疑問を持ったようである。

「はあ？殴ったってどういう証拠があるのかよ？」
と芝井に問い詰める。

「あります。田中さんの打撲痕は右腕の外側に出来ている。これは左手で殴られていることを意味する。なぜか？相手と面と向かって右手で相手の右腕を殴ろうとすれば腕の内側に痕が出来ていないといけない。仮に田中さんが防御をしようとしていたなら相手が攻撃することを予想して腕を曲げて（ボクシングのファイティングポーズのように）いたでしょうから腕だけに打撲痕を残すことはできない。あなたは左利きだ、今のような推論が成り立つ資格を有している。」

栗海は苦々しげな表情を浮かべていたが、

「そんなもの、あんたの想像だろ。第一、全てあんたの言う通りだ

つたとしても殺しと繋がらねえだろが。」
と反論した。

「繋がるんですよ、殺人と。」

芝井は栗海の方を見て言った。

「さつきからゴチャゴチャ想像だけで俺を犯人にしたがっていやがるが、ちゃんとした証拠をだせよ。無いからそうやってデタラメしか言えねえんだろ。」

大分理性が無くなってきている。通行人もこちらを見て怪訝そうに通り過ぎていくが栗海にはそれが見えていないようだ。だが芝井はあくまで穏やかな口調で、

「そのためにここまで来たんですよ。実は日曜日に着ていったスーツを一式全て貸して欲しいんです。なんらかの痕跡があるかもしれない。」

と言った。その瞬間、栗海は急にニヤリと笑った。人を陥れようとする嫌な笑みだった。

「昨日、クリーニングに出したよ。残念だったな、刑事さん。痕跡とやらも綺麗さっぱり無くなって帰ってくるんじゃないか。」

ははつと笑った。

「昨日だと！お前、自分に容疑がかかっていると思ったからあわてて出したんじゃないのか。」

新田が責める口調で言うが、栗海は平然と、

「それも推測だろ？おれは昨日に出そうとあんたたちが来る前から思ってたんだ。」

勝ち誇ったように言う。新田は万事休すか、と思い芝井の方を見る。が芝井の表情は変わらず穏やかなままだった。

「そうですね、仕方ない。新田刑事、クリーニング屋に行って確かめましょう。」

芝井は新田に呼びかけた、が新田にはそれが何を意味しているのか理解が出来なかったので動くことが出来なかった。しかし新田より速く栗海の方が反応した。

「確かめるって、何を確かめるんだよ。」

「もちろんネクタイの繊維ですよ、栗海さん。この事件の凶器はネクタイだ。犯人は凶器を隠したのではなくて、殺害に使用後も堂々と見せていたのですよ。そうですね？」

栗海の表情は一瞬陰を見せたがすぐに立ち直ったかのように、

「さあ、知らねえよ。それでも痕跡は跡形も無く消え去っているから今更ネクタイを調べても意味ねえだろうって。」

「いえいえ、そうではなくて田中さんの指についている繊維と照合したいんですよ。人は首を絞められても即死するわけじゃない。意識的にも無意識でも締めている物を外そうとするんです。その際に出来る引っかき傷、吉川線というんですが、もその時にできるんです。田中さんがネクタイを外そうとしたときにあなたあのネクタイの繊維が田中さんの指に残った。つまりあなたが田中さんを殺したなよりの物的証拠になるでしょう。」

栗海はすでに狼狽していた。

「バカな、俺はちゃんと指も拭き取って。」

と言った途中で口をつぐんだ。芝井が攻勢をかける。

「栗海さんが読んでいた推理小説はずいぶんと前の物じゃないですか？警察の捜査技術は昔よりも数段進歩している。目に見えない微細な繊維でも特定するには十分なんですよ。どうしますか？自白しても良いですし検査結果を待ってから逮捕しても良いですし、選ぶ権利はあなたにあります。まあどちらにしても罪が軽くなるわけではないですが。」

栗海はがっくりと膝を折った。新田は栗海を立ち上がらせてパトカーに乗せて連行した。芝井はそれを見送ったあと自分の住処へと戻っていった。

数日後

「いやあ芝井さまさまだったな、礼を言うよ。」

芝井の事務所を訪れた新田が言った。

「まあそんなに難しい事件でもなかったな。」

まんざらでもないような顔で芝井も答える。

「でもお前、どうして栗海が『お金を盗んだ』り『田中を殴った』っていうことがわかったんだ？」

「『法正が定軍山の戦いで夏候淵を倒すために黄忠に授けた策』と同じようにしただけさ。」

「はあ???」

デジャヴのように新田が驚く。

「『三国志』だよ。大まかに定軍山の戦いを説明すると、攻撃側の法正と守備側の夏候淵という指揮官同士の戦いで、黄忠というのが法正側の先鋒の武将だ。夏候淵は短気な指揮官だったので法正は夏候淵の陣を見渡すことができる小さな山の上に陣を構え、その後別働隊の黄忠には少しづつ陣を進めるよう指示を出した。通常山の上に陣を構えることは上策ではないのだが、夏候淵は自身の陣容が丸見えなのと同じわりじわり前へ来られているを嫌い、法正がいる山を攻め取ろうと出陣してきた。夏候淵が攻めてきたところを、山の下の方の黄忠と山の上にいる法正とで挟み撃ちにして徹底的に叩きのめした、という戦いだ。因みにこの戦いで夏候淵は戦死している。本来守勢側は攻撃を食い止めれば良いだけなので、無理して出陣していく必要なんてないんだ。それを敵指揮官の性格を見極め利用し、自分の有利な土地までおびき寄せ戦った法正の知略の勝利だ。」

芝井は一息付き、コーヒーを飲む。

「それと、栗海の逮捕とどういう関係があるんだ？」

「つまり、栗海にとって『殺人』という事実がどうしても守りたい砦なわけだ。正攻法では辿り着けない、と俺は考えた。そこで窃盗から傷害、傷害から殺人と同じわりじわりと近づいて相手を危険な位置まで誘っていたわけだ。結果的に俺の推論は当たっていたわけだ。」

けど、その時は確証があつて言つてたわけじゃない。あくまで目的は窃盗や傷害が栗海の仕業かどうかではなくて、栗海を殺人という位置に誘いたかっただけなんだから。事実栗海はだんだん興奮してきて、我を忘れて最終的にはボ口を出して捕まった。正直、被害者から栗海のネクタイの繊維が検出されるかどうかは五分五分だと思つていたんだ。だからこういう手で行くしかないと考えた。」

「なるほど、お前が言つてた『駆け引き』つてこの事だつたんだな。」

新田が言つと、芝井が穏やかな表情を浮かべ笑つた。

「うーん、すごいなお前。もう、すごいという言葉しか出てこないよ。」

新田は感心しきりだ。

「今回はたまたま相手が短気で策が嵌まったにすぎない。万人に通じるような手ではない。」

窓から見える景色を眺めながら芝井は遠い目をして言った。

「この事件、お前はどこらへんから栗海が犯人だと思つてたんだ？」

新田が一番聞きたかつたことを芝井に尋ねる。

「最初、お前と会つて事件の内容（アリバイ？参照）を聞いてからだ。」

平然と答える。

「それはないだろ。まだアリバイの裏も証拠も固まっていけないあの状況でどうやって犯人が分かるつていうんだ？」

抗議するような声で言う。芝井は笑いをこらえ切れない様子だ。

「むふふ。あの時はお前とのくだらないやり取りも役に立つことがあるんだ、と感心したもんだ。」

「どこだ？どこのやり取りだ？」

新田は必死に答えを見つけようとしている。

「『ドレミファ荘で田中一郎が110号で殺されていた』つていうくだりだよ。思い出してみろよ。」

新田は手帳をめくり、その時の内容を確認し思い出そうとした。

「あの時は、確かお前が『この珍妙な名前は本当か?』とか言つて、俺が『作者の文才が無いから』と返事した。さらに、第一発見者の名前と被害者の部屋番号は駄洒落じゃないか(アリバイ?参照)と俺が言ったか」

「もう答えは出てるぞ。」

芝井はコーヒーを飲みながら言う。

「ええつ、分からねえよ。うつ、もう降参だ。」

新田は両手を上げた。芝井はコーヒーカップを置いて話し始めた。

「『駄洒落』だよ。」

「駄洒落?」

「そう。お前は気付かなかつたかもしれないが、あと何個か作者が意図して作つた駄洒落が含まれている。その中の一つに『犯人は栗海だ』と直接示す言葉がある。」

「なんだよ、その示している言葉つて?」

「容疑者の名前だ。桃川豊、栗海成、柿沢修、この三人の名前を見ただけで犯人が分かる。」

ここで一度降参したはずの新田が息を吹き返す。

「ちよ、ちよつと考えさせてくれ。桃川豊、栗海成、柿沢修。全員三文字で構成されているな。いや、ちよつと待てよ。桃、栗、柿。『桃栗三年柿八年』だ!」

新田は大声を張り上げた。ところが芝井は、

「それも作者の洒落の一つだ。けどそれはお前が見つけた駄洒落と同じで直接意味を持つものじゃない。ちなみにそれぞれの苗字の二文字目の『川』、『海』、『沢』も意図されていると考えていいだろう。」

と素っ気ない。新田はもう完全に戦意喪失していたので芝井が続けて話す。

「答えは『栗海成』という名前だ。」

「それがどうして犯人に繋がるんだ? 駄洒落にもなつてないじゃないか。」

「そう。これは駄洒落には違いないが、一味違う加工が必要なんだ。そのまま読んでも駄洒落にはならない、そこで読み方を変える必要があるんだ。まず栗海成を『栗』、『海』、『成』に分ける。栗はそのまま『くり』と読み、海は『み』と読む。ほら晴海という地名とかあるだろう。そして成は、ここが一番の難所なんだが、『なる』と読む。」

「ふうん。それで『くり』、『み』、『なる』、『くりみなる』になったところでこれも駄洒落になってないじゃないか。」

「最後にもう一つだけ手順を踏まなければいけない。この『くりみなる』を英語に変換すると『クリミナル』が『CRIMINAL』となり、『犯人』という意味になる。つまり栗海成という名前は『犯人』という言葉を併せ持っていたんだ。」

新田は啞然とした。作者のニヤニヤした顔が浮かんできて忌々しい。そして

「俺たちは最初から作者の駄洒落に振り回されてきたんだな」

力無い声でつぶやく。

「それも考えようだな。俺は作者の駄洒落は確かにくだらなかつたが、こういう謎を作ってくれたことには感謝しているよ。大切なのは起きた事件や物事そのものではなく、それを通していかに自分自身が成長するかにある、と思う。いろいろな経験をさせてもらって俺も少しだけ成長した気がするよ。」

芝井が柄にもなく、真面目な話をする。

「そうだな。俺もお前とのやり取りで色んな事を学んだ。これを次に生かさなきゃな。」

すでに立ち直った新田が力強く話す。

「それにしてもお前には感謝しているよ。近々“ふみ”で祝勝会でもしよう。」

「そうだな。マスターも『ただ飯食いがついに役に立ってくれた』って泣いて喜んでくれるだろう。」

芝井が自嘲気味に言う。

「そのときは連絡する。じゃあ今日はこの辺で仕事に戻るとするよ。」

「ああ、今度は金になる話を持ってきてくれ。」

芝井がそう言くと、新田は笑って芝井の事務所を後にした。

新田は署に帰る途中、本屋を見つけるとUターンして駐車場に車を止め中に入った。

「いらっしやいませ。」

アルバイトだろうか、若い女性が新田の方を見ずに無感情のまま応対する。新田はそれを一瞥し、レジカウンターにいる店員に向かって声をかけた。

「『孫子』という本はありますか？」

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1605o/>

芝井探偵の推理

2010年10月20日12時31分発行